

令和 7年 6月

日本科学未来館イベント「こどもからみる不思議世界探求」
にご参加いただいた皆様へ

2025年 5月 24-25 日に上記イベントにご参加いただき、誠にありがとうございました。多くのお子さんとその保護者の方に参加協力をいただき、大変貴重なデータを得ることができました。心より感謝いたします。

ここでは須藤の担当した「多様な他者をどう捉える？」というテーマの心理学実験について、基礎的なデータ解析が終わりましたので、参加された皆様全体の傾向について報告します。

研究実施者：須藤美織子（国際基督教大学）

E-mail: mioko.sudo@icu.ac.jp

研究統括者：山口真美（中央大学）

研究概要

異文化間の円滑なコミュニケーションには「自分の当たり前が相手にも通用するとは限らない」という視点が不可欠であり、そのため異文化理解を促す教育では文化の「違い」に注目することが多くなっています。ただし、相違点を過度に際立たせると、「異文化の人とは理解し合えない」という印象を与え、相手との心理的距離が拡大してしまう可能性があります。そこで本研究では、文化間の「違い」だけでなく「共通点」にも注目した教育的アプローチの効果を検証することを目的としました。

お子さんには、日本ではあまり知られていないアフリカの国・ベナン共和国（以下、ベナン）について学んでいただきました。教育内容は2種類あり、①ベナンの文化（日本との違いや共通点）に関する情報を学ぶグループと、②ベナンの気候や自然環境といった文化以外の情報を学ぶグループのいずれかにご参加いただきました。教育の後には、ベナンの人々に対する理解や印象を測定するため、次の3つの課題に取り組んでいただきました。

1. 「この子は知っているかな」： 日本文化に関する知識（例：「しゃもじはご飯をすくう道具」「浴衣はお祭りに着ていく服」）について、日本とベナンの子どもがどの程度有しているかを予測してもらいました（図1）。



図1. 「この子は知っているかな」の問題例。

2. 「どっちが好きかな」： 2人の子どもの写真を提示し、どちらの子をより好むかを選んでもらいました（図2）。提示された写真の組み合わせは、日本の子ども同士、ベナンの子ども同士、そして日本の子ども1人とベナンの子ども1人の3通りで、そのうち日本とベ



図2. 「どっちが好きかな」で使用された写真の例。

ナンの子どもを並べた条件での選択傾向に注目しました。

3. 「ボタン早押し」：画面に表示された子どもの顔写真に対して、「うれしい表情」または「かなしい表情」のどちらかのボタンを押してもらいました（図3）。課題には、ベナンの子どもに「うれしい表情」を、日本の子どもに「かなしい表情」を押すよう指示する条件と、その逆の条件がありました。親しみを感じる相手ほど「うれしい表情」ボタンへの反応が早いとされることから、反応時間をもとに好意的態度を推定しました。



図3. 「ボタン早押し」で使用された写真の例。

結果

本研究では、文化に関する情報を通じて「違い」と「共通点」の両方に触れることが、異文化への理解や親近感にどのような影響を与えるかを検討しました。結果として、ベナン文化の学習有無（グループ①／②）による課題反応の差は認められませんでした。そのため、以下では両グループを統合し、全体としての課題の傾向についてご報告します。

「この子は知っているかな」では、ベナンの子どもが日本文化に関する知識を持っている可能性は、日本の子どもより低いと予測されました（図4）。これは、児童期において、自文化では「当たり前」とされている知識が、異文化の相手にとっても「当たり前」とは限らないことを理解していることを示唆します。

「どっちが好きかな」では、日本とベナンの子どもを並べた条件で、日本の子どもをより好ましいと選ぶ割合が高いことが示されました（図5）。この結果は、接触頻度の高い相手に対して肯定的な感情を抱きやすいという、基本的な対人認知の傾向を反映していると考えられます。

「ボタン早押し」では、ベナンの子どもに「うれしい表情」、日本の子どもに「かなしい表情」を押す条件よりも、その逆の条件における反応時間の方が短い傾向が見られました（図6）。この結果は、明示的な選好だけでなく、反応時間といった間接的な指標においても、接触頻度の高い相手に対して好意的な感情が表出することを示唆しています。

また、保護者の皆さまには、異文化経験や関心、養育態度に関する質問紙にご協力いただきました。皆さまの回答とお子さんの課題における反応との相関を検討しましたが、関連性は確認されませんでした。

本研究では、異文化教育による明確な効果は見られませんでした。その要因として、実施した課題が異文化理解や親近感の変化を捉えるには適していなかったことや、異文化教育において共通点の強調が不十分であったことが考えられます。本研究の結果を踏まえ、より効果的な異文化教育のあり方や、その効果を適切に測定できる課題の検討を進めたいと考えています。

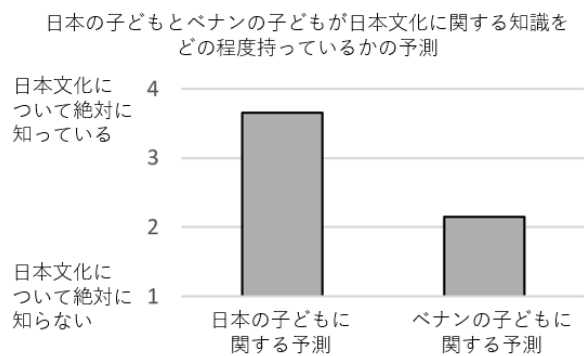


図4. 「この子は知っているかな」における回答の平均傾向。

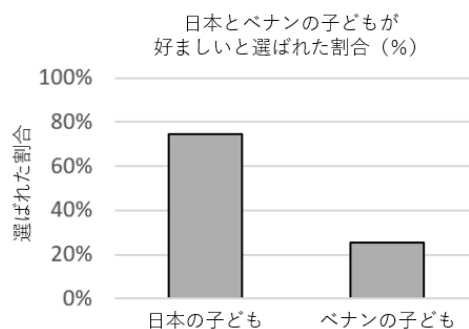


図5. 「どっちが好きかな」における回答の平均傾向。

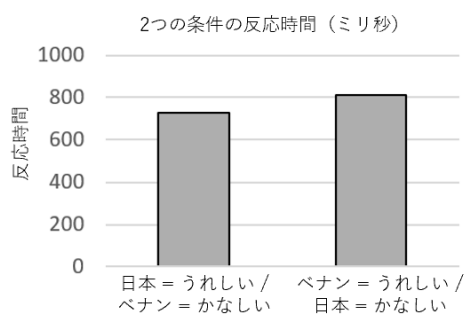


図6. 「ボタン早押し」における反応時間の平均傾向。